

肺癌が甲状腺腫瘍内に転移した 1 手術例

2019. 1. No.15

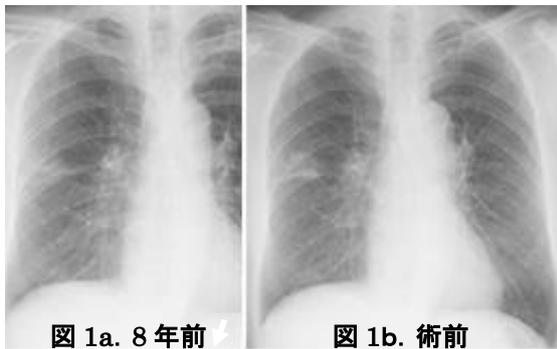


図 1a. 8 年前

図 1b. 術前

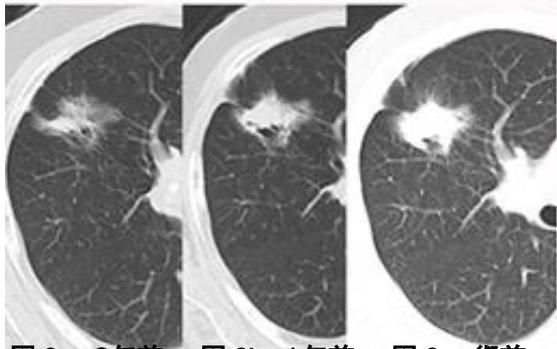


図 2a. 3年前, 図 2b. 1年前, 図 2c. 術前

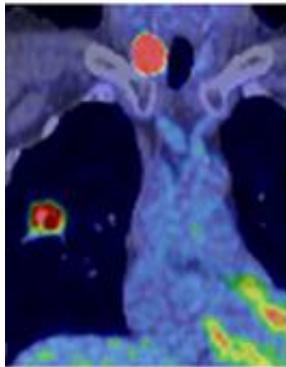


図 3

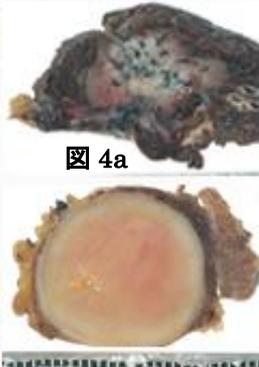


図 4a

図 4b

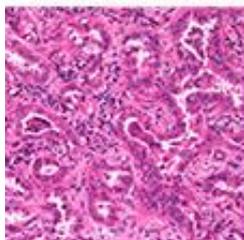


図 5

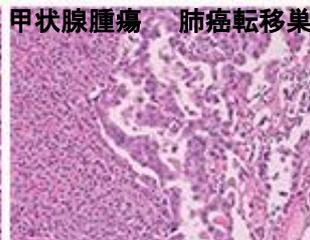


図 6

甲状腺腫瘍 肺癌転移巣

肺腺癌の組織像(図 5) と酷似した。以上の結果より本例の甲状腺病変は肺癌の甲状腺濾胞性腫瘍内への転移と考えられた。従って、肺癌の病期はIVA となり、現在、当院の呼吸器内科で化学療法を継続中である。

考察: 腫瘍の腫瘍内転移は①衝突癌やリンパ系組織への転移を除き、②2 つ以上の腫瘍の一つが③他腫瘍内に浸潤する、の 3 点を満たす事とされる²⁾。本例は全てを満たしており、腫瘍の腫瘍内転移と判断された。本病態は予後不良とされているので化療後も厳重な観察が必要である³⁾。文献. 1) Chikaishi Y, et al. J Thorac Dis 2017; 9 : 5278, 2) L V Cambell, et al. Cancer 1968; 22: 635, 3) Matsukuma S, et al. Virchows Arch, 2013; 463: 525

症例: 70 歳代の男性。8 年前の検診で右中肺野に異常影を (図 1a) , 3 年前の CT では上中葉間に 39mm 大の mixed GGO を指摘されていた (図 2a) . 以降も腫瘍の緩徐な増大と充実成分の増加を認めたので (図 2 b) , 当院を紹介された。

合同カンファレンス: 当院の CT で腫瘍は更に増大して 43mm となった (図 2 c) . 中葉浸潤を伴う右上葉肺癌を疑われ、生検にて腺癌と診断された。PET-CT では肺病変の他に甲状腺右葉にも FDG の高集積を認め (図 3) , 生検で腺癌と診断されたが、①同時性重複癌か、②何れか一方から他方への転移なのかの組織学的判断は困難であった。①であれば両腫瘍の切除を、②であっても単発転移であれば切除後の集学的治療に予後が期待されるので¹⁾、肺切除後に甲状腺切除を行う事が望ましいと結論され、これを患者、家族に説明し同意を得た。

手術所見, 術後経過: 上葉病変の中葉への浸潤を認め、右上・中葉切除(胸腔鏡下)+リンパ節郭清を施行した。経過は良好で術後第 11 病日に軽快退院した。その 1 ヶ月後に甲状腺右葉摘出術 (図 4b) を施行し、術後第 6 病日に軽快退院した。

病理組織学的所見: 肺病変は肺内へのリンパ節転移と中葉への浸潤を伴って、TTF-1 陽性、Napsin 陽性を示す浸潤型腺癌で(図 5) , 甲状腺病変は TTF-1 陽性、Napsin 陰性の濾胞性腫瘍と診断されたが、その中の一部に不整な管状、乳頭状に増殖する異型細胞 (TTF-1 陽性、Napsin 陽性) を認めた (図 6 の右部分) . これは先に切除した